

高等学校家庭科における問題解決学習の課題と展望

— ホームプロジェクトの実践を通して —

学籍番号 249315
氏 名 越智 亜紗姫
主指導教員 鈴木 真由子
副指導教員 小崎 恭弘

1. 背景と目的

Society5.0 の到来やウェルビーイングの向上を掲げる現代教育において、目の前の事象から課題を見だし納得解を生み出す「問題解決能力」の育成が求められている。高等学校家庭科では、実生活に根差した問題解決学習として「ホームプロジェクト（以下：HP）」が重視されてきた。HP は、生徒が家庭生活から問題発見・テーマ設定、計画、実践、反省・評価を行うもので、主体的に解決を図るプロセスを通じて、より豊かな生活を創造する資質・能力を育む重要な役割を担っている。しかし、HP の教育的意義を最大化するためには、教師の指導と生徒の学習との間にある相違点や共通点を精査する必要があるが、両者に着目した研究は未だ十分な説明がなされていない。

そこで本研究では、教師と生徒へ HP に関するインタビュー調査を実施し、M-GTA を用いて両者の概念構造を生成・比較する。教師の指導と生徒の学習の間にあるギャップを可視化することで、HP の課題と可能性を明らかにし、問題解決学習の実効性を高めるための具体的な改善策を提案することを目的とする。

2. 研究方法

2.1 研究Ⅰ：ホームプロジェクトの実践

2025 年 3 月から 4 月にかけて、K 高校の課題研究「家庭科班」20 名を対象に、HP を課題研究への接続を目的とした HP の実践を行った。事前説明にて、HP の意義や問題解決プロセス、評価基準を提示し、春休み期間中に生徒個人でテーマ設定から実践・自己評価までを完結させた。春休み後、授業内での発表会を実施し、ルーブリックを用いた相互評価および教師によるフィードバックを行った。

2.2 研究Ⅱ：インタビュー調査と分析

家庭科教員 5 名（以下：教師）と生徒 7 名を対象に、HP に関する認識を問う半構造化インタビューを実施した。2025 年 6 月から 8 月にオンライン及び対面で調査を行い、指導上の意図と学習実感を聴取した。分析には M-GTA を採用し、逐語録から概念、カテゴリーを生成して、教師・生徒それぞれの結果図を作成した。さらに両図を比較・検討し、共通点と相違点を整理した統合結果図を作成することで、指導と学習の間にあるギャップの可視化を試みた。

3. 結果と考察

3.1 研究Ⅰ：ホームプロジェクトの実践結果と考察

実践の結果、生徒は HP を「自由研究」「宿題」と捉え、生活課題の自分事化や課題発見の難しさが顕著であった。提出された成果物は、計画や根拠の記述が不十分で、問題解決のプロセスを正しく理解できていない実態が浮き彫りとなった。また、相互評価では教員との評価基準に大きな乖離が見られ、科学的視点の不足が露呈した。HP の質を担保するには、事前の例示や評価基準の明確化といった、授業内での構造的な指導支援が不可欠であると示唆された。

3.2 研究Ⅱ：インタビュー調査と分析の結果と考察

(1) 教師：教師は、生徒の【生活実感が乏しい】実態を背景に、行為と結果を重視した PDS サイクルより、行為の意味を吟味する「実践的推論プロセス」を重視していることが明らかになった。具体的には、【過去作品の提示】や【問い返し】を行い、課題設定の困難さを克服する指導の工夫がなされていた。こうした指導は、生徒が自らの選択の妥当性を問い直す、現代的な問題解決学習への深化であり、『家庭科本来の学びを再生する実践としての HP』であることが示唆された。

(2) 生徒：分析の結果、当初 HP を「宿題」と受動的に捉え戸惑いを感じていた生徒が、家族との関わりや試行錯誤を伴う実践を経て、主体的な学習へと転換していくプロセスが明らかになった。実施後は【家族への感謝】や【自己成長実感】から自己効力感を獲得し、さらに発表を通して客観的な自己省察を深めていた。これらの一連の変容から『家庭との関わりを通して自分の生活を見つめ直すための HP』が生成された。一方で、【学びの継続性】が構造的な課題として残されており、実践を日常化させる指導の在り方が示唆された。

(3) 統合：比較・統合の結果、教師と生徒の両者の視点から〔生活と学びをつなぐ体験としての HP〕が生成された。分析により、教師は【課題発見力】を重視し、生徒は【課題解決力】による自己成長に価値を見出しており、指導と学習のギャップが明らかになった。一方で、【テーマ設定の困難】【時間的制約】【継続の難しさ】は、両者共通の課題であった。以上より、生徒の達成感を科学的な視点へと洗練させる構造的な指導支援の必要性が示唆された。

4. 今後の展望

本研究により、HP の本質は〔生活と学びをつなぐ体験〕であり、教師と生徒の課題認識のギャップが、指導と学習の焦点の乖離を生む要因であることが明らかとなった。このギャップを埋め、【時間的制約】や【継続の難しさ】といった構造的な課題を克服するため、HP のプロセスに基づく授業モデルを提案する。具体的には、「問題発見自走型（家庭基礎）」と「ケーススタディ型（家庭総合）」の 2 モデルである。これらは授業内を「練習の場」とすることで、生徒の実践へのハードルを下げ、主体的な意欲を促し、教師の指導負担軽減と HP の質の向上を両立させるものである。

今後は、複数校での実践検証を通じて、HP の教育的意義を定量的に実証するとともに、指導ノウハウを一元化したガイドラインの体系化を図る。これにより指導負担の軽減と質の向上を両立し、生徒の生活主体者としての認識に寄与することを目指す。